

竹でできたスラム—バングラデシュ

写真・文
山形辰史
Tatsufumi Yamagata



BNP スラムの水浴び場兼洗濯場（2000年撮影）

スラムは都市貧困の象徴とされる。そこで、発展途上国を旅するとき、いろいろな住居や、そこに住む人々を観察する。しかし、どこがスラムでどこがそうでないかを区別するのは至難の業である。例えば、ブラジルで「スラム」と呼ばれている地域は、山の斜面のような条件の悪いところに立地してはいるものの、その造りはレンガやセメントでできていて、堅牢に見える。

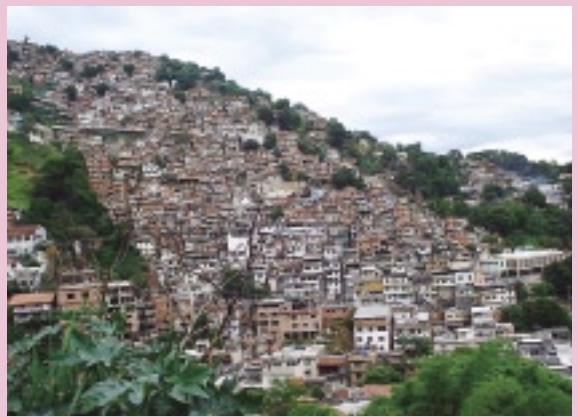
これに対し、バングラデシュのスラムの多くは竹でできている。素人目に見ても熱帯地方では針葉樹が少ない。広葉樹は枝も横に張り出しがちであって、長くて真っ直ぐな材木が得にくい。椰子の木は長くてまっすぐ伸びてはいるものの、その幹は繊維が多く建材には向きそうにない。一方、竹は真っ直ぐ伸びる。しなりはするものの、これを束ねる、またはいったん带状にスライスした上で編む、といった方法で、建材としてしばしば用いられている。

スラムも、できてから歴史が長いスラムと、できたばかりのスラムでは、趣が随分違うように思える。長い時間を経過したスラムは、一つの町を形成する。規模が拡大し、内部に様々な市場ができる。また個人の住まいも、それが竹作りであったとしても「ちょっとあそこを手直してみようかな」といった試みが積み重なって、徐々に住みやすくなるのではないだろうか。

ここで竹から一軒の家を造る方法を説明しよう。筆者は二〇〇〇年に一年間、バン



竹を裂いて薄い帯状にする（写真右側）。そしてそれを編みあわせて、目の粗いゴザ状のシートを作る（写真左側）



ブラジル・リオデジャネイロでスラムと呼ばれる地域(2001年撮影)



「ゴザ状のシート」は丸めて保管できる（2000年撮影、ボナニ・レイクにて）



BNP スラムの、とある作業場。壁から天井、柱、ベンチの表面等々が、すべて竹でできている（2000年撮影）



「ゴザ状のシート」に枠組みと支えを取り付けて「竹壁」のできあがり。これがスラムの家の壁になる(2000年撮影、BNP スラムにて)



市内の竹置き場（2000年撮影、ボナニ・レイクにて）

グラデシユの首都ダカの通称「BNP スラム」の真ん中に位置するバン グラデシユ開発研究所に客員研究員として勤務した。その際に見た、周囲の竹作りの住まい・店舗や竹の加工場を写真で示した。

上の写真はBNPスラム内のある作業場の中である。柱から壁、天井、床に至るまで全て竹でできていることがわかる。竹が陸路で運ばれてくる場合には、運送人夫さんが、灼熱の太陽に焼けたアスファルトの上を裸足で、長い竹を荷車に載せて引きずるようにして運んでくるのである。その竹はいったん種類別に竹置き場に整理される。次にその竹を薄く広く裂くのである。すると長い布状の「竹板」ができる。これを互い違いに編みあわせることによって、「竹壁」の材料が作られる。この「編み竹」は柔軟性に富むので、これを巻いて保管することが可能である。この「編み竹」を壁にするには、縦横斜めに、別の竹で枠取りをしなければならぬ。このように枠を取り付けられるとふすま状の「竹壁」が完成する。これをユニットとして壁や天井に用いることによって、スラムも小ぎれいに見えるし、増築や間仕切りにも役立つというものである。スラムに限らず、バン グラデシユ



2001年の総選挙前のBNPスラム。右奥に見える塔のある建物はラジオ・ Bangladesh、正面奥の茶色い建物が国立図書館である。トタン屋根は竹でできた構造の上に乗っている（2000年、Bangladesh開発研究所4階から撮影）



ダカ市内の建築現場。わざと曲げたのかと思うほど芸術的に、足場が歪んでいる（2006年、ポリバークにて）

の至る所で建築に竹が用いられている。建設現場の足場、支え、階段にも用いられる。しかし当然ながら、高層ビルの建築を竹だけを用いて支えるというのは、素人目にも無理を感じる。上に建築現場の竹の支えが美しく屈曲している例を示した。率直に言って、このような作業現場では働きたくない。

スラムは「不法占拠地域」と定義されることがある。その土地の所有者と、正規の利用権取引を行わずに住み続けるためには、その所有者が住民の立ち退きを行わない、という条件が必要になる。件のBNPスラムは国の土地に立地していた。私が所属していた研究所も、政府関係機関なので国の土地に立地していたのである。したがって、国が強制立ち退きを執行しない限り、住民はその土地に住み続けることができるわけである。ちなみにBNPとは Bangladesh Nationalist Party の頭文字であり、Bangladesh 政界においてアワミ連盟と勢力を二分するBangladesh民族主義党の略称である。このスラムは同党の庇護を受けていると言われていた。

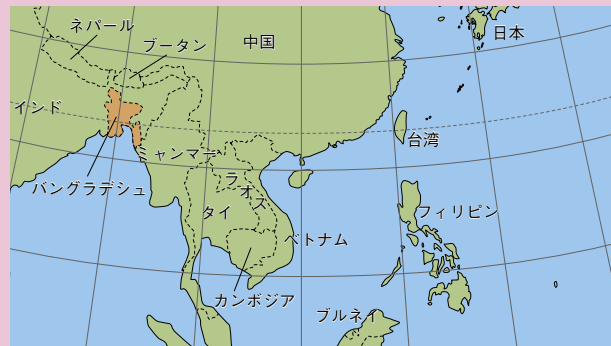
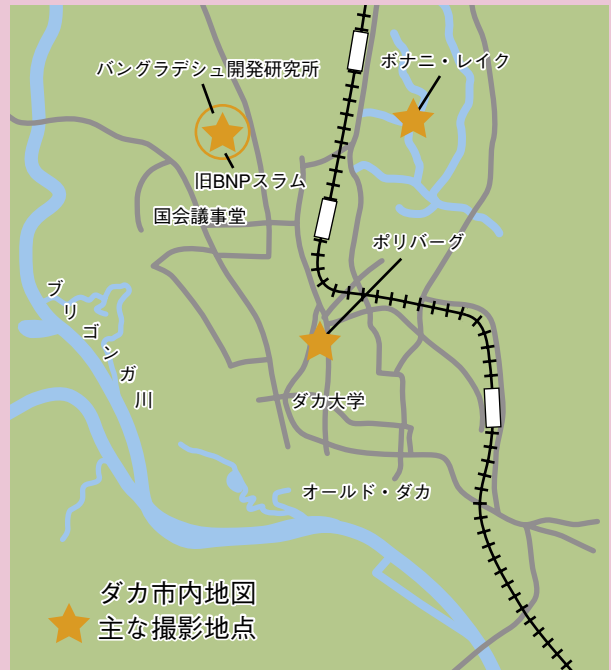
私がBangladeshに滞在していた二〇〇〇年にはアワミ連盟が政権を握っており、その際でもBNPスラムは活況を呈していた。当時のBNPスラムの写真を見ていただきたい。多くの家がトタン屋根の下に軒を連ね、この屋根の下には例の竹壁で覆われた住居が林立しているのである。



2001年の総選挙後の同じ場所。もう住居はほとんどない（2002年6月撮影）



2006年3月の同じ場所。奥の方に住居が増えていることと、政府系機関の小さな建築物が増えていることに注意されたい



二〇〇一年に総選挙が行われ、BNPが勝利したことから私は「これであるスラムもあと五年は安泰だ」と思った。しかし私の安直な予想に反して、選挙後、間をおかずにBNPスラムは強制撤去の憂き目にあった（写真を参照）。この真相は、私のような傍観者には知る由もない。しかし冷静に考えてみれば、スラムの撤去をしたと考えている人がいたとすれば、それに最も適する時期は選挙直後なのだ。「もうおまえには用はない」という時代劇の言い回しを思い出させる。次の選挙に近くなればなるほど、スラムの強制撤去の記憶はBNPの集票にマイナスに響くであろう。

次の総選挙を二〇〇七年一月に控え、Bangladeshは総選挙モードに入っている。かつてのBNPスラム地域には徐々に例の竹壁による家が建ち始めている。また政府機関もこの土地に少しずつ移転している。

二〇〇一年の強制立ち退きのあと、そこに住んでいた人々がどこに移っていったのか知らない。スラムの人々を取り巻く環境はBangladeshの政治に左右され、その政治家達の意志決定も、主要援助供与国や貿易相手国との関係によって大きな影響を受ける。現在この国において急成長している輸出向け縫製業をはじめとする産業に彼らが労働者として吸収され、賃金収入を上げていくことに期待したいものである。

（やまがた たつふみ／アジア経済研究所開発研究センター）